茨城県南部における古墳出現期の集落出土土器編年

メタデータ	言語: jpn 出版者: 駿台史学会 公開日: 2022-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柏瀬, 拓巳 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22448

駿台史学　第174号　247-272頁，2022年2月
SUNDAI SHIGAKU（Sundai Historical Review）
No. 174, February 2022. pp. 247-272.

茨城県南部における古墳出現期の集落出土土器編年

柏　瀬　拓　巳

要旨　本稿は茨城県南部を対象として，弥生時代後期後半から古墳時代前期までの集落出土土器の編年を提示したものである。

茨城県南部を含む関東平野北東部の弥生土器は，器面全体に縄文を施すいわゆる「北関東系」などと呼称され，その土器様式が古墳時代になると大きく変化することは認識されてきた。しかしその在地系集団と外来系集団の関係性など変革の背景や具体的様相の議論は深化が見られない現状がある。

そこで本稿では将来的に集落動態分析を行うことを見据え，弥生時代後期後半の土器と，古墳時代の土器とを分けて検討し，分類を行ったうえでそれらの一括資料による共伴状況から画期を設定する手法で編年を作成した。その結果，当該地域の弥生時代後期後半から古墳時代中期前葉までⅠ－Ⅴ期に区分し，Ⅱ期までを弥生時代後期後半，Ⅲ期を古墳時代前期前葉～中葉，Ⅳ期を古墳時代前期後葉，Ⅴ期を古墳時代中期前葉に比定した。

なお，茨城県南部の在地系弥生土器である上稲吉式土器は壺形土器と甕形土器の器形分化が不明瞭とされているが，器高と頸部径の比率について定量的分析を行ったところ器形からは確実に壺と甕を分けることができた。煮沸痕跡からも両者の器種分化は明瞭であることから，あくまで「壺と甕に同一の施文原理が働いている」のみであることが確認された。

また，古墳時代前期，すなわちⅡ期からⅢ期にかけては大きな様式転換が起こり，千葉県域の影響を大いに受けた土器様式へと転換するが，その中でも上稲吉式土器の無文化に在地系要素の残存がわずかながら確認できた。

キーワード：古墳出現期，茨城県南部，土器編年，北関東系弥生土器

はじめに

現在の栃木県・茨城県域を中心とする関東平野北東部の一帯は「東関東」や「利根川以北」などと呼ばれ，弥生時代にあっては関東平野北西部や南部とはまったく様相異にする文化圏とされてきた。そしてその文化を代表する地域色豊かな土器は古墳時代になると南関東や東海地

域に系譜を持つ土器様式に大きく転換することもまた，広く認知され，その背景にある社会的変革に関する議論も多くなされてきた。

しかし近年では，弥生時代から古墳時代への移行という大転換期の歴史的評価に関する議論は低調で，当該地域における古墳出現期の変革のあり方とその背景について論ずる余地が生じていると考える。

本稿ではそういった社会的変革を将来推察することを最終的な目的に見据え，その時間軸として土器の編年観を提示したい。今回論ずる茨城県南部でもすでに弥生時代後期並びに古墳時代前期の土器編年の双方の領域において積極的な議論がなされているが，在地土器様式の崩壊過程を明確に示した論考は管見に触れておらず，この点を先行研究に補完して弥生時代土器編年と古墳時代土器編年との接続を図る。

1. 研究の現状と課題

本章では当該地域とその周辺での土器編年研究史を概観するが，弥生時代後期の土器編年研究と古墳時代の土器編年研究には少なからず断絶があり，一括してその研究史を述べることは難しい。そのためここでは茨城県南部の弥生土器，古墳時代の土器を分けて記述する。

(1) 茨城県南部の弥生時代後期後半の土器編年研究

茨城県南部では，在地の土器型式として上稲吉式土器が設定されており，茨城県北部の十王台式土器に並行する土器型式とされた（勝田市史編さん委 1977）。その施文の特徴として口縁部下端に「イボ状突起」を有し，櫛描文が見られないこと，羽状縄文を有することなどが挙げられている。また，茨城県教育財団の『研究ノート』においてはより細かく，薄い複合口縁でその下端に貼瘤を施し，同位置に刻みを施すこと，縄文原体は附加条第 1 種で羽状構成を取るものと取らないものがあること，底部木葉痕が多いことが挙げられている（弥生時代研究班 1995・1996・1997・1998・1999・2000）。

これらの土器研究が大きく進展したのは 1990 年代後半で，土浦市原田遺跡群（原田北・原田西・西原・原出口遺跡）の調査を一大契機として上稲吉式土器とそれに伴出する土器群に対する議論がなされるようになったことが大きい。原田遺跡群は 100 軒を優に超える弥生時代後期後半の竪穴住居を検出しており，さらにその中に外来系土器が見られることなどから注目されてきた。その編年については，比較的近年のものとしては鈴木素行（鈴木素 1997）と小玉秀成（小玉 2008）による検討がある。

鈴木は原田北遺跡の土器について分析を行い，文様帯要素の組合せから上稲吉類型，根鹿北類型，原田北類型の 3 類型を示した。そしてそれらの共伴状況から，根鹿北類型→原田北類型という型式変化とそれに基づく 2 段階の設定を示唆した。この鈴木の論考で対象となったのは原田北遺跡の土器のみであるが，①被熱痕に着目した器形分化への指摘，②口縁部形態とその

施文の組合せによる類型化，③共伴関係から2期区分を示唆したといった点は注目される。

その後上稲吉式土器を扱った論考が，小玉秀成による霞ヶ浦沿岸を対象とした後期の土器編年である。4つの口縁部類型ごとに型式変化を説明し，当該地域の弥生時代後期を7期細分した論考であるが，その上稲吉式土器とその前後の編年観には鈴木の類型でいう根鹿北→上稲吉→原田北という段階設定を行っており，2段階とみる鈴木の編年観と相違がある。

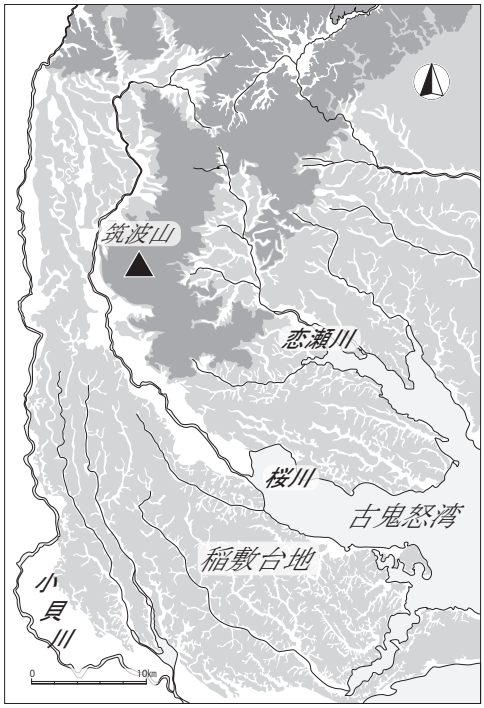


図1　茨城県南部の地理的環境

(2) 茨城県域の古墳時代土器編年研究

茨城県域の古墳時代前期の土器編年に関する検討も決して低調ではなく，1970年代より東海村須和間遺跡（茂木1972）やひたちなか市三反田遺跡（三反田遺跡群調査団1979）の発掘調査報告書において編年が試みられ，「額田式」（宮内1988）というような型式名も，今日ではほとんど用いられることはないものの設定されてきた。また黒沢彰哉や井上義安，佐藤次男などによる資料紹介や弥生土器との共伴に関する議論（黒沢1981・井上1980・佐藤1988）を経て，90年代には茨城県内のS字甕の集成・検討（古墳時代研究班1992・1996・1997・1998）が行われるようになった。

1990年代後半以降になると発掘調査による資料が蓄積して弥生後期後半の土器と古墳前期に比定される外来系土器が共伴する例も多くみられるようになり，より広域的かつ網羅的な編年が試みられるようになった。例えば塩谷修は茨城県域の編年を作成し，その中で茨城県北部と南部の土器様相を分けて示した。さらに共伴関係から十王台式や上稲吉式土器もその編年に組み込んでいる（古墳時代土器研究会1997）。

その後2016年に開催されたシンポジウムにおいて，茨城県内を6地域・9小地域に区分し，それぞれの編年を作成する試みがなされ，Ⅰ期，Ⅱ期（新・古），Ⅲ期と区分されている。さらにその中でも高浜入り地域については墓制と併せた古墳時代前期社会まで論じられている（樫村・谷仲ほか2016）。

(3) 土器編年の課題

以上，土器編年に関する研究の現状について概観したが，弥生時代後期後半の土器編年については，鈴木と小玉双方の異なった編年観が併存状態にあり，双方の妥当性を検討する必要が

ある。

また古墳時代編年との接続を図るうえで，器種設定に関する課題も存在する。茨城県域に分布する弥生後期の土器の多くは「甕」や「壺」,あるいは「広口壺」とも報告される土器であり，いわゆる「北関東型弥生土器」などと呼称される土器群で，その形態は「壺 , 甕の形態上の分離は難しいもの」（川崎 1983）などと記述されてきた。これに対して鈴木素行は頸部形態に着目して器形分類し，煮沸痕の有無から貯蔵具と煮沸具とを分離しており，東関東の弥生土器の組成観に一石を投じたと評価できる。ただ,鈴木はその指摘の重要性はさほど強調しておらず，いまだ川崎以来の組成観が支配的となっているのは 2000 年以降の当該時期を扱った論説にも同様の記述が見られることなどからも否定できない（比田井 2004）。そのため器高と頸部形態をより客観的に判断し，器種を判断する，あるいは当該地域の土器が実際に壺と甕との器形分化が不明瞭であるかどうかを判断・明示する方法が必要といえる。

古墳時代土器編年については，茨城県下においては早くから十王台式土器の編年研究が積極的になされたこともあり，古墳時代編年と弥生土器との接続をする意識が強いことは前述の塩谷（1997）や谷仲など（2016）の論説によく表れている。そして「弥生後期後半段階→南関東系・東海系の甕や東海系高坏が見られる段階→高坏が柱状脚高坏となる段階」という大枠としての編年観は大きな変更を迫られることなく定着しつつある。

とはいえ，これまでに土器分類を明示し，それらの共伴関係から時期区分が検証された論説で管見に触れたものはなく，甕形土器などそれぞれの土器系譜を把握したうえで分類の過程を経た編年が求められる。また，すでに指摘したが，弥生後期の土器群の中にいかに外来系の土器が移入し，古墳時代へと移行していくのかについても様式論的に検討する余地が大きいと考える。

2. 研究の枠組みの設定

(1) 時間的範囲

本稿において対象とした時間的範囲は弥生時代後期後半段階からであり，土器型式では茨城県北部における十王台式土器，南部における上稲吉式土器とされる土器が見られる段階を上限とする。そして下限は古墳時代中期前葉とし，輪積痕を有する柱状脚高坏やケズリ甕が主要組成となる段階までとする。この時期設定は在地の弥生時代後期社会に外来系土器が見られるようになり，古墳が出現，定着する過程を明らかにするという目的による。

(2) 空間的範囲

対象とする地域はすでに示しているように茨城県南部であり，上稲吉式土器という明確な在地の土器分布圏である霞ヶ浦西岸地域（桜川・恋瀬川流域）を中心とした編年を作成する（図 1）。

この地域の地理は，霞ヶ浦に代表される湖沼や，大小の河川によって樹枝状に開析された台地などにより構成される。とりわけ霞ヶ浦は，かつては内陸として広大な面積を有しており，茨城県南部の地理的環境を大きく特徴づけている。

3. 弥生時代後期後半の土器編年

(1)「壺」と「甕」の器形

本節では器種設定をした様式的な編年作成を目標とするが，そのためには器種構成をまず把握しておく必要がある。しかし，壺と甕については茨城県南部を含む東関東地域の弥生後期ではその器種分化が不明瞭という評価が今なお強く，その点の再検討を要することはすでに述べた。そのためここでは編年に先立って「壺」や「甕」などとされる土器群の，器高と頸部形態の2属性から形態的差異の有無について検討する。なお，ここで対象とした個体は原田遺跡群（原田北・原田西・西原・原出口遺跡）と天の川を挟んで位置する根鹿北遺跡から出土した土器のうち，器高と頸部形態を確認できる資料（54個体）に限定している。

頸部形態は頸部の最もすぼまる箇所の径を胴部最大径で割り，100倍した数を「頸部形態指数」として数値化する。この指数は頸部径の胴部最大径に対する割合であり，頸部形態指数が50のとき，頸部径は胴部最大径の半分となり，頸部形態指数が100のときは頸部径と胴部最大径が同じということになる。

以上の手法・前提に基づいて器高と頸部形態指数の散布図を作成すると図2のようになる。この分布をみると器高（Y軸）40cm以上でなおかつ頸部形態指数（X軸）50以下の一群（1群）と，器高40cm以下で頸部形態指数が50以上の一群（2群）という形で大きく2群に明瞭に分けられた。

この二つの群を鈴木素行の器形分類にあてはめると1群は大型細頸土器，2群は中・小型中・太頸土器ということになる。器高25cm前後・頸部形態指数70強の範囲と器高15cm前後・頸部形態指数80前後の範囲に比較的集中してはいるが，鈴木のいう中頸と太頸との間に明確に境界を設定することは難しいため，ここでは一括する。

以上の分析から，原田遺跡群出土の土器のうち「北関東型」などと呼称される土器群は2つに大別できることを確認した。そのうち1群とした土器群は大型で，なおかつ頸部径が胴部最大径の半分以下という点

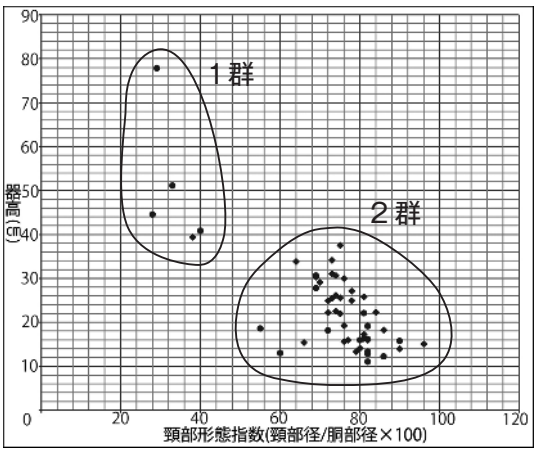


図2　上稲吉式土器の器高と頸部形態指数散布

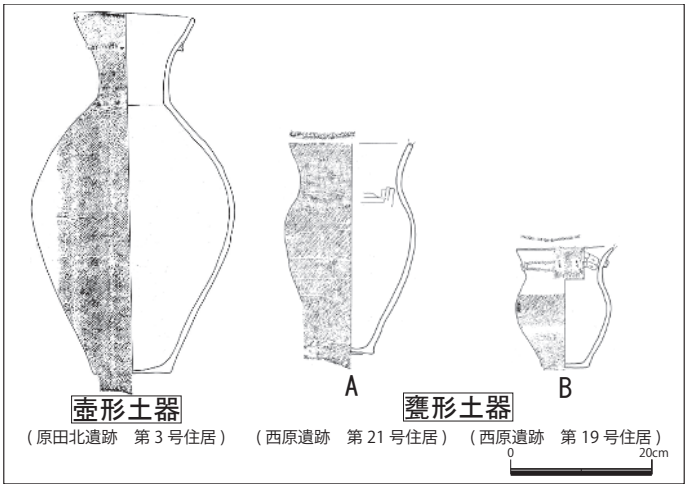


図３　上稲吉式土器の器形分類

を鑑みて「壺形土器（以下壺・図３左）」と器種設定が可能であると考える。

同様に２群についても頸部がすぼまらない形態であることを鑑みても「甕形土器（以下甕）」と器種設定できる。さらに，その器高の分布傾向から 20cm にその分布境界を設定し，甕については 20cm 以上の個体を大型品として A 類，それ以下を小型品として B 類と設定したい（図３右）。

（2）煮沸痕

上記のように器種分類を設定したが，あくまでそれは器形による分類であって直接的に煮沸器種と貯蔵器種とを分離することを示すものではない。そこで鈴木の視点を踏襲して煮沸痕跡を有する個体数を分類ごとに計上した。ここで煮沸痕跡としたものは二次被熱痕，付着炭化物，煤の３種類であり，報告書の所見表の記載を基本とし，一部個体については実見による確認を行っている。

そうして得られた結果は図４の通りであるが，煮沸痕を有する壺は５個体中１個体のみで 20％であるのに対し，甕は A 類が 22 個体中 18 個体で 90％と非常に高い割合を示している。B 類についても A 類ほどではないが 25 個体中 10 個体で 38％と，高い割合を保持しており，甕 A・B を合わせて 60％ほどの個体に煮沸痕跡が認められ，壺との比率差は明らかである。

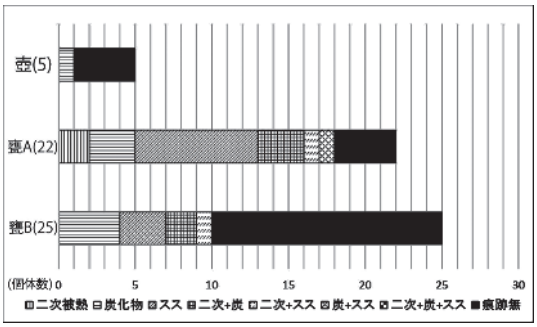


図４　器形ごとの煮沸痕を有する個体の割合

ここで，壺について示す母数が少ないという批判も当然想定されよう。これは，壺が原則として大型品であるゆえに器高が確

認できるほど残存状態の良好な個体が甕と比較して少ないことによる問題である。しかし，頸部形態やその大きさから確実に壺と判断できる破損個体の煮沸痕跡の有無を確認しても痕跡の記載を確認できたのはここに示した１個体のみであり，依然としてその数量が少ないことに変わりはない。

以上の検討結果より，やはり壺とした個体は貯蔵具であり，甕とした個体は煮沸具であった仮説が補強される。鈴木は「中頸形・太頸形という形態の土器を煮沸具，細頸形という形態の土器を非煮沸具」（鈴木素 1997，p.6）ととらえており，頸部形態によって機能分化がなされていたとするが，それと同時に器高すなわち法量でも同様の機能分化が図られていたといえる[(1)]。

先述のように，壺と甕の器形分化が不明瞭であることは上稲吉式土器だけでなく関東平野北東部のいわゆる「北関東型土器」の特徴とされている。熊野正也は上総地域の土器群に対して，この北関東型土器を用いる人々の生業基盤を稲作以外に求める根拠のひとつに挙げており（熊野 1985），そのほかにも関東平野北東部地域のそれ以南との差異を述べる際にも言及されてきた（岡本 1993・比田井 2004 など）。しかし，少なくとも茨城県南部の原田遺跡群の弥生後期後半土器群については，壺と甕は器形分化が可能であることが明らかになった。これまで言われてきたように必ずしも器形分化が不明瞭ということはなく，あくまでも「壺と甕に同一の施文原理が働いている」という表現が適切であると考える。

(3) 編年のための施文分類

前項までの検討で上稲吉式土器の形式設定を行い，この分類をもとに型式細分を行っていく。すでに述べたように，鈴木は文様帯Ⅰ（口縁部文様帯）の属性を分析した結果，前述の３類型（上稲吉・根鹿北・原田北）を抽出し，共に単口縁の類型である根鹿北類型と原田北類型が，前者から後者に型式変化することを示した（鈴木 1997）。それに対し，小玉は「上稲吉式」と「根鹿北式」，「原田北式」は時期的に異なるものととらえてそれぞれⅤ～Ⅶの３段階で区分してい

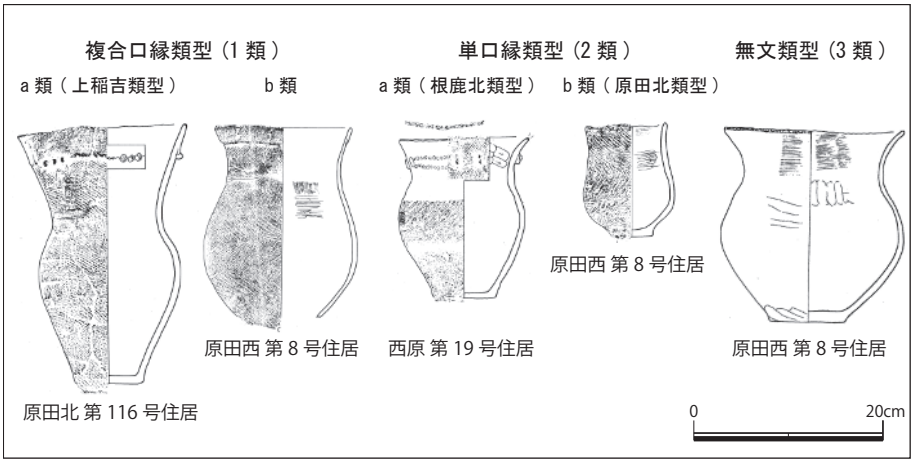


図 5　上稲吉式土器の施文による分類

る（小玉 2008）。ただ，小玉は「根鹿北式」に当てはまる土器群は「縄文施文２段の複合口縁」の類型に含めているが，実際には単口縁土器であり，小玉の３段階区分ではいったん単口縁化（根鹿北式）してから再び複合口縁（上稲吉式）に戻り，再度単口縁化（原田北式）するというやや難のある型式変化をたどることになってしまう。さらに鈴木も指摘していることであるが，上稲吉式と根鹿北式，また上稲吉式と原田北式はそれぞれ共伴例が一定数あり，完全に時間的に独立する型式とは言えないと考えられる(2)。

以上を踏まえ，本稿では鈴木の類型とその考え方を援用し，複合口縁の類型（1類），単口縁の類型（2類）を設定する。さらに無文の類型（3類）の３類型を設定し，それぞれに時間的変遷と想定する細分を次の通り付与することとした（図5）。なお，対象とした個体は原田遺跡群の土器に加え，外山遺跡も良好な一括資料を有するため含んでいる。そしてその時間的区分については弥生後期でも後半の時期で，茨城県南部の土器に櫛描文が原則的に施されなくなる段階以降とする。

【1類】

a類：「上稲吉類型」

薄く幅広の複合口縁を有し，貼瘤あるいは口縁下端刻みなどの装飾を施すもの。

b類

a類同様の複合口縁であるが，貼瘤や刻みなどの装飾をもたないもの。

【2類】

a類：「根鹿北類型」

単口縁で棒状工具による刺突文列を有するもの。多くの場合刺突文列は上下２列で施されるが，一部１列のみの個体も存在する。また，貼瘤を刺突文列と同位置に施すことが多い。

b類：「原田北類型」

単口縁で装飾を持たないもの。

【3類】

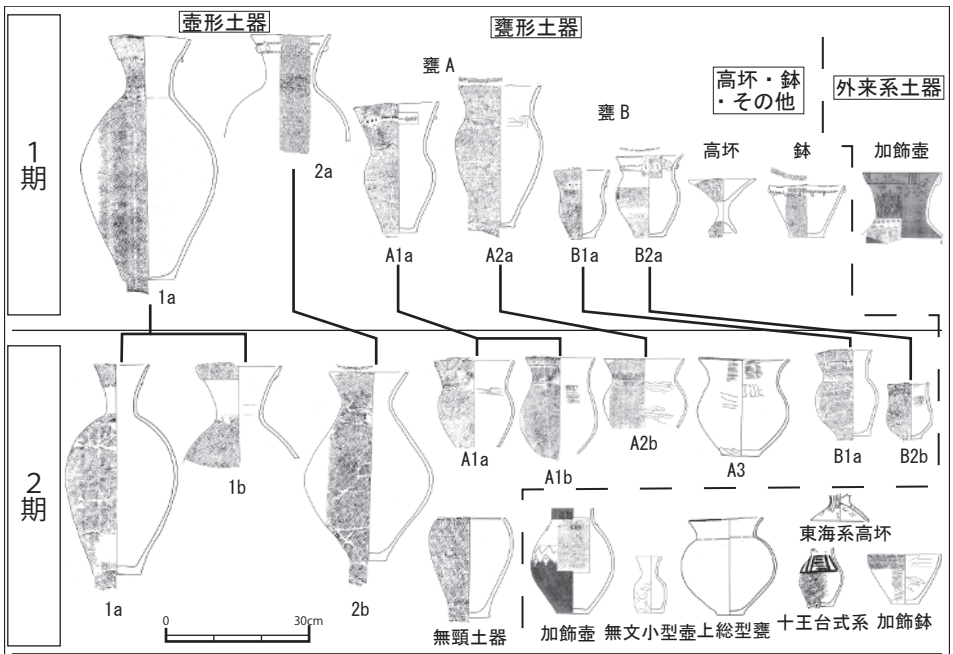
無文の土器群で，細分は行わない。器面に縄文が施されず鈴木や小玉の論考では対象外となっているが，上稲吉式土器と共伴する例が少なからず存在し，古墳時代との編年の接続を考えるうえで重要と判断したことから，類型化して扱っている。

器面はナデ，一部ハケ調整でありながら，頸部屈曲の緩さや底部形態など上稲吉式土器に近い器形を呈している。なお，この無文土器の成立過程については，上総地域の平底甕の影響が大きく関連していると想定する。つまり，頸部屈曲が緩い器形であることや，底部径が大きい点などは上稲吉式土器の伝統的な製作技法によるものである一方，やや寸胴気味の器形や縄文を施さずにナデなどを最終調整とすることは上総地域の平底甕の影響を受けたことによるもの

表 1　原田遺跡群を中心とした上稲吉式土器の共伴状況

時期	遺跡	遺構	頸部構成による類型の組合せ	壺型土器					甕型土器													遺跡	遺構	高坏形土器				鉢形土器			無頸	その他外来系土器				
									A						B									高坏				鉢						十王台		
				1a	1b	2a	2b	3	1a	1b	2a	2b	3	1a	1b	2a	2b	3				縄文	小型	赤彩	東海	縄文	加飾	無文		無文小型壺	南関東系壺	点数	段階	上総型甕
1期	原田北	1	1aのみ						2					1							原田北	1														
	原田北	3	1aのみ+外	3					1												原田北	3										1			
	原田北	33	1aのみ						2												原田北	33					1								
	原田北	115	1aのみ	2					1												原田北Ⅱ	115													
	原田北	116	1aのみ	△					△1												原田北Ⅱ	116													
	西原	22	1aのみ	1					1												西原	22													
	原出口	10	1aのみ	△										1							原出口	10													
	原出口	35	1aのみ	1					△												原出口	35													
	原田北	6	1aのみ	1					1			△									原田北	6													
	原田北	41	1aのみ			△			1			△									原田北	41													
	原出口	9	1aのみ											1							原出口	9													
	原田北	11	1a2a	1													1				原田北	11													
	原田北	29	1a2a+外						1		1										原田北	29													△
	原田北	68	1a2a														1				原田北	68													
	原田北	72	1a2a			1								2△							原田北	72	1												
	原田北	78	1a2a	2		1					1										原田北	78		△					1						
	原田北	93	1a2a	1							1										原田北	93													
	原田北	106	1a2a	1		1			1												原田北Ⅱ	106													
	西原	19	1a2a	1													1				西原	19													
	西原	21	1a2a	1							1										西原	21													
	原田北	77	2aのみ														2				原田北	77													
	根鹿北	6	2aのみ														1				根鹿北	6				△									
	根鹿北	10	2aのみ			2											1				根鹿北	10				1									
	根鹿北	19	2aのみ			1										△					根鹿北	19													
	根鹿北	22	2aのみ								2										根鹿北	22													
	根鹿北	2	2aのみ			△															根鹿北	2	1												
2期	原田北	112	1aのみ+3	1									1								原田北Ⅱ	112													
	原田北	5	1a2b											△				△			原田北	5													
	原田北	16	1a2b	2					1			1									原田北	16													
	原田北	31	1a2b									△		△							原田北	31								1					
	原出口	48	1a1b	1	1																原出口	48													
	原田西	2	1a1b+3		2								△		1						原田西	2													
	原田西	8	1a1b2b+3・外							1			1			△		2△			原田西	8						1				1	1	3～4	
	原出口	18	1a3	△1										1△							原出口	18		△											
	原田北	14	2a2b+3・外								1	1									原田北	14		△							1				
	外山	45	1aのみ+外						△												外山	45											1	3～4	
	外山	48	1aのみ+外						△												外山	48				1									
	原田北	99	2bのみ				1											1			原田北Ⅱ	99													
	原田西	5	2b+3										2					1			原田西	5													
	原田西	6	2b+3・外									△	2								原田西	6			1				1						
	外山	5	2bのみ+外						△				1								外山	5										2		1▲	

※彩色された列は附加条縄文施文など在地系の類型であることを示し、濃い彩色は1a/2a、淡い彩色は1b/2bの後出的な類型を示している。
※2△は覆土出土例で▲は覆土出土個体が2個体であることを示す。



【上稲吉 1 期】　壺 1a・加飾壺 : 原田北 3、壺 2a: 根鹿北 19、甕 A1a: 原田北 116、甕 A2a: 西原 21、甕 B1a: 原出口 10、甕 B2a: 西原 19、高坏 : 原田北 72、鉢 : 根鹿北 10　　【上稲吉 2 期】　壺 1a・甕 A1a: 原田北 16、壺 1b: 原出口 48、壺 2b: 原田北 99、甕 A1b・甕 A3・甕 B2b・加飾壺・加飾鉢 : 原田西 8、甕 A2b・無文小型壺 : 原田北 14、甕 B1a: 原田西 2、無頸土器 : 原田北 31、上総型甕 : 外山 5、十王台式系土器・東海系高坏 : 外山 45

図 6　上稲吉式土器の編年

と考えられる。

以上，形式設定をしたうえで文様のあり方から時間的変遷を想定できる類型化を行った。これを踏まえて次項ではその共伴関係を確認し，その変遷の妥当性を検証する。

(4) 各形式の共伴状況

【1 類・2 類の共伴関係】

3 類や外来系土器との共伴関係は後述するとして，まずここでは縄文を施文する 1・2 類の共伴関係について述べたい（表 1）。

複数個体を出土する住居の軒数を見ると，施文の分類における 1a のみ出土している住居は 14 軒，1a と 2a が共伴する住居は 9 軒，2a のみが 6 軒，1a と 2b が共伴する住居が 3 軒，1a と 1b とが共伴する住居が 2 軒，1a と 1b と 2b とが共伴する住居が 1 軒，2a と 2b が共伴する例は 1 軒，2b のみの出土例は 4 軒という結果が得られた。

母数は少ないが，1a 類は 2a 類・2b 類両者と共伴するのに対し，2a 類・2b 類の共伴例は原田北遺跡 14 号住居の 1 例のみである。このことから，2a・2b はそれが系譜差・時間差のどちらであるにせよ原則的に共伴しない類型といえる。

【1・2 類と外来系土器・3 類の共伴関係】

続いて，2a と 2b の関係が系譜的なものなのかあるいは時間的なものなのかを検討するために，より後出的要素と考えられる外来系土器と無文の 3 類との共伴状況を確認したい。

1a のみでは前 14 軒中 4 軒，1a・2a の共伴住居では 9 軒中 1 軒，2a 類のみでは 6 軒中 0 軒，1a・2b の共伴住居では 3 軒中 0 軒，1a・1b の共伴住居では 2 軒中 1 軒，1a・1b・2b の共伴例では 1 軒中 1 軒，2a・2b の共伴住居では 1 軒中 1 軒，2b 類のみ出土する住居では 4 軒中 3 軒という共伴状況が確認できた。

このことからは，まず 2a のみ出土した住居では外来系土器の出土例がないことが言えるのに対して 2b は絶対数が少量な割に非在地系土器や 3 類との共伴例が多くみられると言える。すなわち，2a → 2b･3 の流れは確実であり，鈴木が示した根鹿北類型（2a）から原田北類型（2b）への変遷に裏付けを与える結果となった。

また，鈴木の編年観では型式的に細分されなかった上稲吉類型，本稿における 1 類についても同様に，1b になって 3 類との共伴例が見られるようになり，1 類にも細分の可能性を示すこととなった。ただし，1b は 1a から独立して出土する状況は見られず，あくまでも 1a が一貫して存在し，それが型式分化する形で装飾を喪失した 1b が出現するようになると考えるほうが自然であろう。

以上の共伴関係の検討から，2a → 2b という変遷を確認し，b 類が出現する段階には外来系土器や無文土器との共伴例が増加することが確認できた。この 2 類の変遷と，外来系土器や無

文土器の組成への参画という２点を根拠として上稲吉式土器に２つの段階（１期・２期）を設定したい。具体的な各期の組成状況は次のようにまとめられる（図６）。

まず１期について，主要組成は壺・甕Ａ・Ｂの 1a，2a 類であり，縄文を施す在地系の高坏形土器や鉢形土器が少数ながら見受けられる。また，僅少ながら外来系土器が存在し，南関東系の壺や上総地域の甕と思われる個体が見られる。

それが２期になると壺・甕の 2a に替わり 2b が組成し，1a は残存する一方で 1b も組成に参画する。さらに南関東系の壺や甕，高坏，十王台式土器などが急増し，それと連動するように甕Ａに３類が出現して上稲吉式土器の無文化が進行する。

また，１期段階では少数ながら附加条縄文を施す高坏や鉢が組成したのに対し，２期段階ではそれらが見られなくなる。２期段階でも組成に現れる比率としては少数であるが，東海系のものと思われる高坏や南関東系のものと思われる鉢が代わって組成するようになる。

これらの外来系土器の中には，原田西遺跡の８号住居出土壺（図６「加飾壺」）のような折衷型式といえるような個体も見られる。当該個体はヘラ状工具による山形文や，帯縄文，円形浮文，頸部や胴部下半の赤彩など南関東における壺の装飾を有するが，長胴で径の大きい平底の器形が在地系土器のそれと類似するほか，胎土も長石を多く含み在地系と同じ胎土と考えられ，在地系土器の中に客体的に組成している。このような個体は在地集団による間接模倣品と考えられる。

こうした在地系の供膳器種が貯蔵・煮沸器種に先んじて外来系器種に置換される変化や，外来系土器の間接模倣品が見られるようになる変化は，群馬県西部において樽式土器から古墳時代前期の土器組成に変化していく過程で貯蔵器種や煮沸器種に先行して供膳器種が外来系のものに置換される現象（若狭 1990）と軌を一にするものといえる。

以上のように恋瀬川流域の土器を器種細分し，様式論的に検討することで，茨城県南部特に霞ヶ浦北西岸地域の弥生時代後期後半を２段階に分けることができた。本稿ではこの編年観に則って当該地域の弥生時代後期後半を論ずる。

また，これより特に断りのない場合「上稲吉式土器」の用語はこれまで多くの研究者が用いているように，「茨城県南部における弥生時代後期後半期の在地土器様式」とし，上稲吉類型に限らず根鹿北類型や原田北類型を含む様式として用いることとする。

4. 古墳時代前期の土器編年

(1) 分類

土器を分類するにあたり，その基本的な考えをここで示しておく。

筆者はすでに群馬県南東部～栃木県南西部一帯の渡良瀬川流域における編年案を示しており（柏瀬 2020），同様の分類手法を採る。まず器形とそれから想定できる機能の差を根拠として甕，

表２　古墳時代の土器とその細分

器種			細分1		細分2	
甕	A	ハケ調整台付甕	1	頸部屈曲が緩やか	a	口縁端部にキザミを施す
			2	頸部から口縁にかけて直線的に立ち上がる	b	口縁端部を面取りあるいは平滑に調整する
			3	頸部屈曲がくの字状	c	口縁端部を丸く収める
			4	口縁部に輪積痕を残す	d	ケズリ調整主体
	B	ナデ調整台付甕	甕Aに同じ			
	C	平底甕	1	輪積痕無あるいは1段のみ	a	外面ナデ調整、口縁端部にキザミを施す
			2	多段に輪積痕残す	b	外面ナデ調整、口縁端部調整なし
					c	ハケメ調整後ナデ消し
					d	外面ケズリ・ヘラナデ主体
	D	S字状口縁台付甕	1	口縁部拡張あり	a	頸部内面ハケ、肩部ヨコハケ
			2	口縁部拡張なし	b	頸部内面ハケ無、肩部ヨコハケ有
					c	頸部内面ハケ無、肩部ヨコハケ無
					d	ケズリ調整主体
	E	北陸東部系甕	細分無し			
	J	十王台式系甕	細分無し			
	K	上稲吉式系甕	1	複合口縁類型	a	上稲吉類型/根鹿北類型
			2	単口縁類型	b	原田北類型
			3	無文類類型		
壺	A	単口縁壺			a	最大径を胴部下半に持つ
					b	最大径が胴部中位で球胴状
	B	折返し口縁壺			a	長い頸部・最大径胴部下半
					b	短い頸部・胴部中位で球胴状
	C	複合口縁壺	1	口縁帯を下垂させる	a	口縁帯、胴部などに何らかの装飾を持つ
			2	受口状口縁	b	装飾なく無文
			3	幅広の口縁帯を貼付する		
	D	二重口縁壺	1	口縁部内面に明確な平坦面を有する	a	頸部長が口縁部と同程度
			2	口縁部内面に明確な平坦面を持たない	b	長頸化が進む
	E	パレス壺	細分無し			
	F	大廓式系壺	細分無し			
	H	上稲吉式系甕	甕Kに同じ			
高坏	A	大型開脚高坏			a	脚部端部が内湾するもの
					b	脚部端部が外湾して開くもの
	B	小型開脚高坏	細分無し			
	C	柱状脚高坏	1	細身で裾が広がらないもの	a	輪積痕を残さないもの
			2	やや裾が広がり屈折部を持つもの	b	輪積痕を残すもの
			3	ラッパ状に緩やかに開くもの		
	D	台付鉢形高坏	細分無し			
器台	A	小型器台	1	無稜の受部		
			2	有稜の受部		
	B	結合器台	細分無し			
	C	X字形器台	細分無し			
	D	炉器台	細分無し			
小丸	A	丸底鉢形土器	細分無し			
	B	丸底壺形土器	1	10cm以上の大型品	a	ミガキ・赤彩など丁寧なつくり
			2	10cm未満の小型品	b	ヘラナデ・ケズリのみで粗雑なつくり
	C	短口縁丸底土器	細分無し			
鉢	A	頸部屈曲鉢	細分無し			
	B	単口縁鉢	1	最大径15cm以上		
			2	最大径10cm程度またはそれ以下		
			3	丸底気味で椀形のもの		
有孔鉢	A	単口縁有孔鉢			a	ハケ調整を施すもの
					b	ケズリ調整のみのもの
	B	折返し口縁有孔鉢	有孔鉢Aに同じ			

壺，高坏といった器種を設定し，各器種をさらに土器系譜の差異から細別してアルファベット大文字で表す。さらに，共伴例などから時間的に併存すると考えられる属性を細分１とし，算用数字で表現する。ここで大形式と中形式，小形式が設定できたことになるが，それをさらに時間的変遷を表すと考えられる属性ごとに細分（細分２）し，型式を設定する。なおこの細分はアルファベット小文字で表現する。

この手法から，茨城県南部においては甕形土器（以下甕），壺形土器（以下壺），高坏形土器（以下高坏），器台形土器（以下器台），小型丸底土器，鉢形土器（以下鉢），有孔鉢形土器（以下有孔鉢）の以上７器種を与えることができた。以下では各形式の概要を記し，個々の細別については表２・図７を参照されたい。

【甕形土器】

甕Ａ（ハケ調整台付甕）：Ｓ字甕などのように口縁部に特別な成形を行わず，胴部外面調整

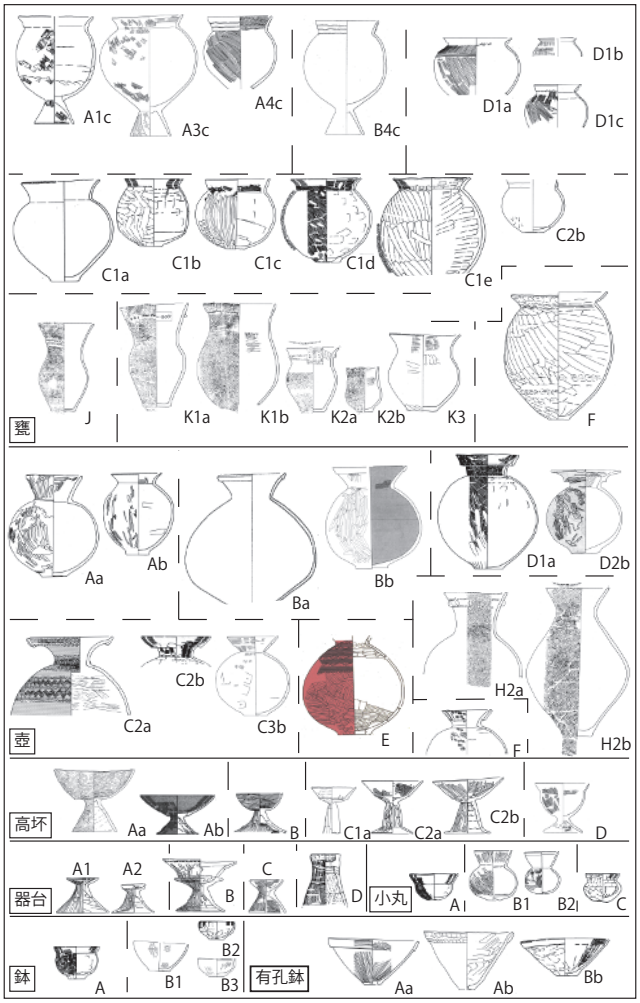


図７　古墳時代の土器分類

はハケを基本とする台付甕である。ハケ調整台付甕は古墳時代前期には東日本に広範に分布する甕であるが，その系譜は相模地域以西に求められる。

甕Ｂ（ナデ調整台付甕）：甕Ａ同様に口縁部に特別な成形を施さず，胴部外面の調整にはナデを用いる台付甕である。細分項目に関しては甕Ａと同じとする。東京湾西岸地域にその系譜を求められる。

甕Ｃ（平底甕）：やや寸胴の器形で，口縁部には特別な成形を施さない平底甕である。台付甕が弥生時代後期東京湾西岸地域以西を特徴づける形式であったのに対し，平底甕は東京湾東岸，とりわけ上総地域の弥生後期の土器様相を代表的に示す甕である。上総地域では養老川流域などでは肩部や頸部に輪積痕を１段残す程度であるのに対し，小糸川流域など南部では頸部以上に多段に輪積痕を残すことが指摘されている（酒巻 1996）。なお，細分２の型式変化仮説

表 3-1　古墳時代の土器共伴状況

時期	遺跡	遺構	甕																								壺																		
			K					J	A					B				C						D			E	H			A		B			C						D			E	F
			1a	1b	2a	2b	3		1b	1c	3b	3c	4c	1b	1c	4c	1a	1b	1c	1d	1e	2a	1a	1b	1c		1a	1b	2a	2b	a	b	a	b	1a	1b	2a	2b	3a	3b	1a	2a	2b		
II期	原田北	112					1																				1																		
	原田西	6				1	2																																						
	原田西	8		1		2	1	1																																					
	外山	5				1		2									△	1																											
	境松	23														1															2						1			1					
	小作	30												1				△													1														
III期（古）	永国	4					2																								1														
	神明	3																								6																			
	神明	9																		1																								1	
	向原	30																	2	1																				1					
	向原	78								1								1		2											1														
	上野古屋敷	96																						1							2														
	金谷	1																	1												1	1													
	金谷	53								1		1							2																										
	金谷	110										1																																	
	境松	34							1			1					1					1	1																						
	六十目	9																				1									2						2								
	前野東	28																1													1														
	熊の山	2432																		2																									
	熊の山	2917								1																					1														
	島名前野	8																1		1											1														
	島名前野	9												1						3													1												
	島名前野	10																		2											2														
	薬師入	74																1																							2				
	篠崎	8																		1											1														
III期（新）	八幡脇	2																		3																									
	八幡脇	6																	2																					1					
	八幡脇	8																2																		1									
	向原	23																	1																										
	向原	31																	1	1																									
	向原	46																1																											
	向原	56																3													1			1				1							
	向原	73																																											
	向原	85																														1													
	上野古屋敷	44																																1											
	辰海道	713																		2											1				1										
	神谷森	6										1																							1										
	神谷森	16										1								1												2						1							
	神谷森	17										1																				1													
	神谷森	39																		1											9	4						3			2				
	神谷森	43																																											
	神谷森	46							1																							1													
	境松	29								1										2																									
	東台	29								1																										1									
	熊の山	133																																											
	高須賀中台	1										1																										1		2					
	高須賀中台東	21																																											
	並木新田台	9																																						1					
IV期	弁才天	44																		1																									
	弁才天	87																	2																										
	辰海道	327																														1													
	辰海道	671																		1												1													
	辰海道	719																																											
	北条中台	77																																											
	北条中台	80																		4					1											1									
	明石	34																		1																									
	明石	112																																											
	うぐいす平	39																																						2					
	熊の山	2908																																											
	熊の山	2926																																											
	高須賀中台東	5																																											
V期	別所	5																																											
	別所	26																		1																									
	永国	7																																											
	神明	12																																											
	原田北	61																		3																				1					
	原田北	117																		1																				1					
	向原	66																	1	2																									
	向原	74																																						1					
	向原	81																		1																									
	上野古屋敷	24																		3																									
	上野古屋敷	32																		1																									
	上野古屋敷	41																		1																									
	上野古屋敷	70																		1																									
	北条中台	42																		1																									
	北条中台	168																																						1					
	明石	122																		2																									
	六十目	7																																											
	六十目	67																		3												1								2					
	六十目	71																																											
	前野東	60																		1																									
	前野東	74																																											
	前野東	77																																											
	前野東	79																		3	1																								
	矢田部漆	2																																											
	矢田部漆	3																																											
	矢田部漆	17																		3												1													
	矢田部漆	18																		1																									
	前野	15																		1																									
	薬師入	80																																											
	篠崎	17																																											
	篠崎	18																		1																									

表 3-2　古墳時代の土器共伴状況

時期	遺跡	遺構	高坏										器台					小型丸底土器						鉢						有孔鉢			
			A		B	C					D	A		B	C	D	A	B				C	A	B			南関東系	ミニチュア	A		B	
			a	b		1a	1b	2a	2b	3b		1	2					B1a	B1b	B2a	B2b			1	2	3			a	b	a	b
Ⅱ期	原田北	112																														
	原田西	6																						1								
	原田西	8																									1					
	外山	5																														
	境松	23																														
	小作	30																														
Ⅲ期（古）	永国	4	1									4						1						2			1					
	神明	3												1																		
	神明	9			1																											
	向原	30																					1									
	向原	78										1																				1
	上野古屋敷	96																														
	金谷	1		1	2																			3								
	金谷	53											4										2	1					1			
	金谷	110			1							1						1														
	境松	34												1																		
	六十目	9																														
	前野東	28											2																			
	熊の山	2432																							1							
	熊の山	2917																					1									
	島名前野	8																							2							
	島名前野	9			2																		3									
	島名前野	10											1																			
	薬師入	74												1																		
	篠崎	8	1																													
Ⅲ期（新）	八幡脇	2		2													2															
	八幡脇	6											1				1	1										2				
	八幡脇	8																														
	向原	23												1		1		1					1									
	向原	31		1										1			1						1									
	向原	46										2			1																	
	向原	56										2			1																	
	向原	73		1													2								1							
	向原	85										2					1															
	上野古屋敷	44																1						1								
	辰海道	713		1													1	1		2			1									
	神谷森	6										1																				
	神谷森	16		1													2			1										1		
	神谷森	17		1	1							1								1								1				
	神谷森	39										3					1															
	神谷森	43		1	1												2															
	神谷森	46									1						1	1														
	境松	29		1																			1									
	東台	29																1														
	熊の山	133		1								2	1					1														
	高須賀中台	1										1					1	1														
	高須賀中台東	21														2	1			1					1							
	並木新田台	9		1								2					1															
Ⅳ期	弁才天	44				3																										
	弁才天	87																							1							
	辰海道	327				1														1												
	辰海道	671													1																	
	辰海道	719				1							1				1															
	北条中台	77													1										3							
	北条中台	80															1															
	明石	34											1				1					1	1			1						
	明石	112										1					2															
	うぐいす平	39															1															
	熊の山	2908										1										1	2			2		1				
	熊の山	2926				1					1						1	1														
	高須賀中台東	5				2											1															
Ⅴ期	別所	5						2												1	4											
	別所	26						1	2								1				2	1										
	永国	7							4								1		1		1		2	1								
	神明	12				1		1									1					1										
	原田北	61						1	3										1	1												
	原田北	117							5												3	1										
	向原	66																			1	1		1								
	向原	74																			3	2										
	向原	81																			1					1						
	上野古屋敷	24																		1				1								
	上野古屋敷	32						1	1											1									1			
	上野古屋敷	41													1											1						
	上野古屋敷	70						1	1														1						1			
	北条中台	42				1	1	1	5																							
	北条中台	168						3													2											
	明石	122																	1							1						
	六十目	7							1										2		2				1							
	六十目	67							1	2									1		1			1								
	六十目	71					1		1													1										
	前野東	60																								2						
	前野東	74																			2			1								
	前野東	77							1														1	1		1						
	前野東	79				1		1	2									1			2								1			
	矢田部漆	2							2												2	1										
	矢田部漆	3							2												2	1										1
	矢田部漆	17							9										2		7					1						
	矢田部漆	18							1										1			1										
	前野	15																	1		1											
	薬師入	80							1												2				1							
	篠崎	17					1	1	1												1											
	篠崎	18						1																				2				

は市原市草刈遺跡の編年（加藤 2000）を参照した。

甕 D（S 字状口縁台付甕）：口縁部を屈曲させて断面 S 字状にする台付甕である。東海西部地域にその故地を有する土器であり，細分には赤塚次郎による編年観（赤塚 1990）や群馬県における編年観（田口 1981）を参考にした。

甕 F（北陸東部系甕）:肩部が張り，底部径が非常に小さい北陸西部の系譜を引く土器で,「千種甕」とも呼称される。個体によっては口縁端部を面取りする。

甕 J（十王台式系甕）：スリット手法による縦区画充填波状文が施される，茨城県北部にその分布の中心を持つ甕である。前節で論じた上稲吉式土器同様その器種の呼称が安定しないが，当該地域で出土した個体については多くが上稲吉式土器で「甕」と判断された小型～中型の中頸ならびに太頸のもので，いずれも煮沸器種に判断されると考え甕とした。

甕 K（上稲吉式系甕）：基本的に附加条第 1 種を器面に施す，茨城県南部の弥生後期後半の土器である。前節の上稲吉式土器の分類においては大小で小形式を設けていたが，ここでは一括して扱い，施文･口縁部形態による分類をそのまま援用する。つまり複合口縁のものを 1 類，単口縁のものを 2 類，無文のものを 3 類とし，それぞれ刻みや貼瘤，連続刺突文を有するもの（上稲吉類型・根鹿北類型）を a 類，それらが見られないもの（装飾を喪失した上稲吉類型・原田北類型）を b 類としている。

【壺形土器】

壺 A（単口縁壺）：単口縁の比較的大型の壺である。

壺 B（折返し口縁壺）：口縁部を折り返す，あるいは幅狭の粘土帯を貼付する土器である。

壺 C（複合口縁壺）：口縁部に幅広の粘土帯を付加するなど各種の成形を行う壺をこの分類に収める

壺 D（二重口縁壺）：外傾あるいは直線的に立ち上がる頸部から，段をもって外反する口縁部を有する壺である。

壺 E（パレス壺）：東海西部地域に由来する壺である。複合口縁で胴部にヘラ状工具や櫛歯状工具による山形文，櫛描文が施されるとともに，赤彩を胴部外面や口縁部に施す。

壺 F（大廓式系壺）：東海地域東部の駿河湾沿岸に由来する大型の壺である。幅広の口縁帯を有し，口縁部内面突帯や棒状浮文あるいはそれを模した沈線などをその指標とする。

壺 H（上稲吉式系壺）：前節の茨城県南部の器形分析で壺と判断した個体である。分類の基準は甕 K と同様とする。

【高坏形土器】

高坏 A（大型開脚高坏）：大きく開く坏部と八の字形に開く脚部を特徴とする高坏で,「欠山式高坏」や「東海系有稜高坏」などと称される土器である。故地は東海西部に求められ，細分は東日本各地の型式変化にのっとっている。

高坏Ｂ（小型開脚高坏）：比較的小型の坏部を持ち，脚部が大きく開く高坏である。高坏Ａ同様に東海西部地域の系譜を引く。

高坏Ｃ（柱状脚高坏）：柱状の脚部を持ち，端部で屈折させて安定化させる高坏である。一般に近畿地方の系譜とされる。

高坏Ｄ（台付鉢形高坏）：口縁端部を外側に屈曲させる鉢形の坏部を有する高坏である。

【器台形土器】

器台Ａ（小型器台）：器高 15cm 程度あるいはそれ以下の土器で，ほとんどの場合受部と脚部との間を貫通する孔を有する。

器台Ｂ（結合器台）：器台Ａと比較して大型で，受部も脚部に対して大きく開く器台であり，受部下位に鍔を有する個体が多い。「特殊器台」などの呼称もあり，その故地については確定的ではないが北陸地域の系譜と目されることが多い。

器台Ｃ（Ｘ字型器台）：坏部，脚部ともに直線的で外形がＸ字状を呈する器台である。その故地については近畿地方と考えられる。

器台Ｄ（炉器台）：千葉県域から茨城県域にかけてみられるやや粗製の器台で，その形態から平底甕の「五徳」的機能を担ったと目される土器である。

【小型丸底土器】

小型丸底土器Ａ（丸底鉢形土器）：直線的に外傾する口縁部に縦詰まりの胴部を持つものである。

小型丸底土器Ｂ（丸底壺形土器）：Ａ類とは異なり頸部がすぼまることによって壺形を呈する土器である。

小型丸底土器Ｃ（短口縁丸底土器）：外傾する短い口縁部を持つもので，鉢形を呈する。

【鉢形土器】

鉢形土器Ａ（頸部屈曲鉢）：平底で内湾する胴部に外傾する短い口縁部を持つ鉢である。

鉢形土器Ｂ（単口縁鉢）：平底で，胴部は直線的に開くかやや内湾して立ち上がる鉢である。

【有孔鉢形土器】

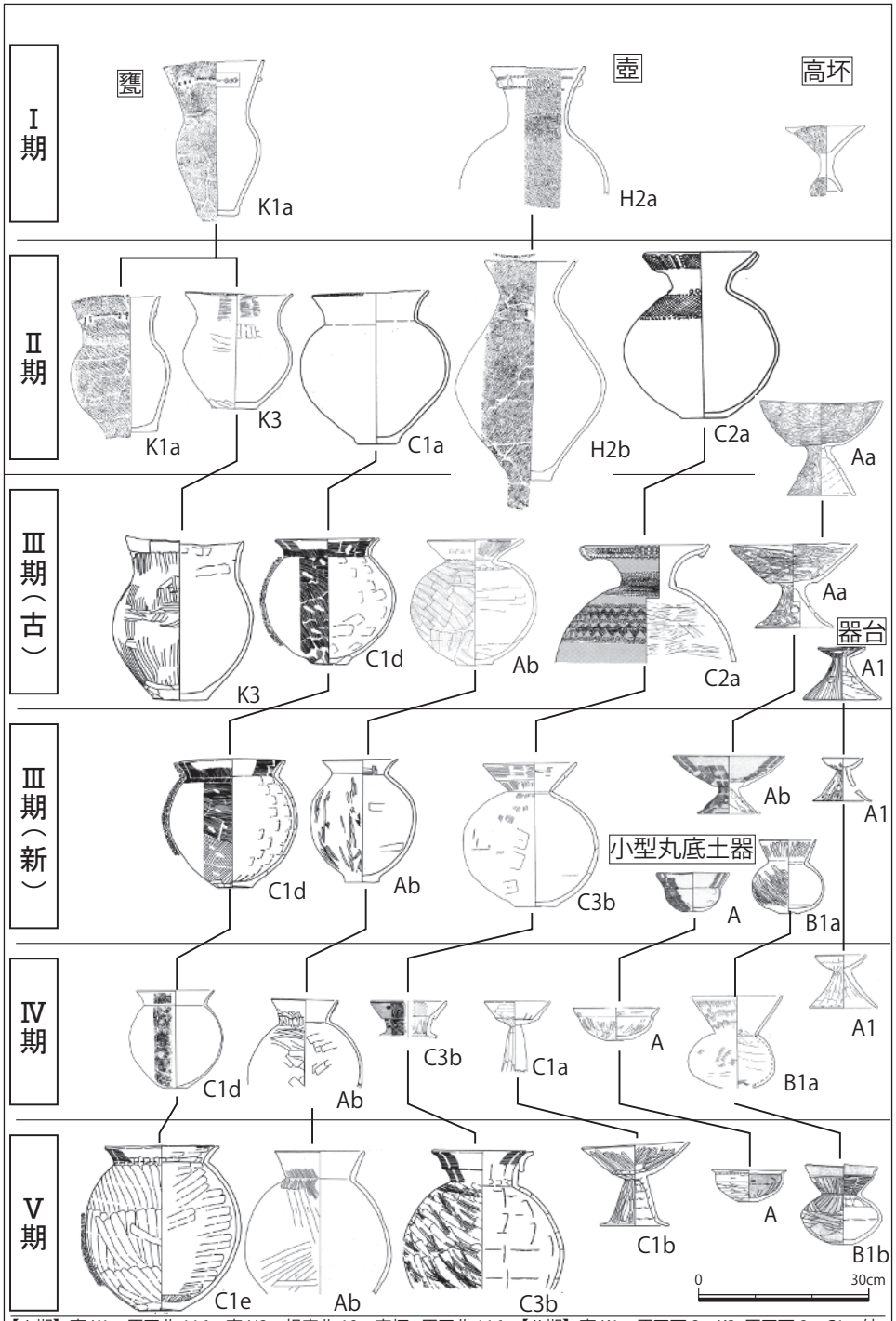
有孔鉢Ａ：口縁部を折り返し，底部に孔を有する土器である。

有孔鉢Ｂ：単口縁の有孔鉢で，Ａ類同様ハケ調整の有無で細分する。

(2) 共伴状況と画期の設定

以上の土器分類に基づいて共伴状況を整理すると表３のようになり，これをもとに画期を設定する。なお，ここでは最初の時期を外来系土器が顕在化し始める上稲吉編年の２期とする。

この共伴状況をもとに各器種の型式変化仮説にのっとって一括資料を組列化すると，①上稲吉式土器（甕Ｋ，壺Ｈ主体）の段階から外来系土器中心の組成にシフトする画期，②各器種の祖型が弥生時代後期に有していた属性が失われて在地化しするとともに，小型丸底土器が組



【Ⅰ期】甕 K1a: 原田北 116、壺 H2a: 根鹿北 19、高坏 : 原田北 116 【Ⅱ期】甕 K1a: 原田西 2、K3: 原田西 8、C1a: 外山 5、壺 H2b: 原田北 99、C2a: 境松 36、高坏 Aa: 小作 14 【Ⅲ期 (古)】甕 K3・器台 A1: 永国 4、C1d: 向原 78、壺 Ab: 神谷森 8、C2a: 六十目 9、高坏 Aa: 篠崎 30 【Ⅲ期 (新)】C1d: 向原 78、壺 Ab: 神谷森 39、C3b: 高須賀中台 1、高坏 Ab・小丸 A: 向原 73、器台 A1: 八幡脇 4、小丸 B1a: 辰海道 713 【Ⅳ期】甕 C1d: 向原 31、壺 Ab: 辰海道 327、C3b: うぐいす平 39、高坏 C1a: 神谷森 76、器台 A1: 熊の山 2908、小丸 A・B1a: 熊の山 2926、【Ⅴ期】甕 C1e: 向原 66、壺 Ab: 谷田部漆 17、C3b: 向原 74、高坏 C1b: 別所 26、小丸 A・B1b: 永国 7

図 8　茨城県南部の集落出土土器編年案

成する画期，③それまでの台付甕や東海系高坏（高坏 A・B）といった古墳時代前期を代表するような器種が急減し，代わって高坏 C のような中期の土器様相へとつながる器種が現れる画期，④前段階で出現した高坏 C や小型丸底土器が粗雑化してより中期的様相が濃厚になる画期，という形で計 4 か所の画期を抽出できた。この画期に基づいて時期設定を行う。なお，第 2 画期の前後段階は様式的なつながりが大きいため同じ時期とし，新古でその差をとらえるものとする。

【Ⅱ期：第 1 画期以前】

では，ここで各時期の土器様相について具体的に論じたい（図 8）。

Ⅱ期は上稲吉式を 2 分した後半にあたる段階で，Ⅰ期からの継続性が高い一方で外来系土器が多く共伴するようになる段階といえる。甕では甕 K が主体である中にナデ調整の甕 C1a・b が見られるようになり，上総地域からの影響がうかがえる。また，つくば市境松遺跡第 23 号住居出土の甕 B4c や阿見町小作遺跡第 30 号住居出土の高坏 Aa などのⅢ期以降の土器よりも明確に古相と判断できる個体もあり，これらは上稲吉式土器とは共伴関係にない。つまり，上稲吉式土器と時期的に共存関係にある外来系土器は上稲吉式土器に客体的に参画するものと共伴せず独立して存在するものの 2 者に分けられることになる。

【Ⅲ期：第 1 画期以後，第 3 画期以前】

Ⅲ期になると大きく土器様相が変わり，それまでの上稲吉式土器様式（甕 K・壺 H）が急速に崩壊し，外来系土器が主体となる。甕では台付の甕 A や平底の甕 C が急増し，甕 C では 1b・c・d 類，2a 類が見られる。その一方，永国遺跡第 4 号住居などで甕 K3 が出土しており，上稲吉式土器が無文化したものが少数ながら残存する。

壺を見ると，壺 A 類が多くみられるが，その中には境松第 36 号住居出土例のように壺 C2a が一定数組成しており，これもまた受口状口縁や帯縄文施文といった点で南関東系の特徴を有する土器として特筆すべきものである。さらに，東海系高坏である高坏 A・B が見られるのもこの段階で，このほか器台や有孔鉢などといった古墳時代前期的な土器組成が出そろう段階といえる。このⅡ期とⅢ期とを分ける画期は土器様相の上で最大の転換点といえよう。

また，Ⅲ期内でも器種ごとの型式変化と小型丸底土器の組成で新古に分けられ（第 2 画期），新相は古相に見られた甕 K や C1b・C2 類，高坏 Aa が見られなくなり，外来系土器が在地化する段階ととらえられる。

【Ⅳ期：第 3 画期以後，第 4 画期以前】

Ⅲ期に定着した土器様相が，Ⅳ期になると再び大きく変容する。具体的にその例を挙げると，甕 A の消滅や高坏 A・B から高坏 C への転換であり，この変化は関東平野各地で看取される現象である。中期的土器様式への萌芽が見られる段階といえるものの，小型器台や精製の小型丸底土器などが多く共伴しており，古墳時代前期の範疇でとらえられる。

【Ⅴ期：第４画期以後】

Ⅴ期には甕 C1e や高坏 C2b，小型丸底土器 B1b・B2b などが見られ，Ⅳ期の各器種がハケやヘラミガキ調整などの省略といった形で粗雑化し，器台が消滅するなど古墳時代中期の土器様式が確立した段階である。また，Ⅳ期以来の傾向ではあるが，壺の組成率が一層低くなることもこの時期の特徴といえる。

(3) 編年観の評価

以上当該地域における古墳出現期の編年観を整理し，弥生時代後期後半については鈴木素行の編年観を，古墳時代以降については既往の編年観を追うこととなった。既存の編年に照らし合わせると，2016 年シンポジウム編年（樫村・谷仲など 2016）Ⅰ期を本稿Ⅱ期，Ⅱ期を本稿Ⅲ期としてそれぞれ新･古段階，Ⅲ期を本稿Ⅳ期と設定できる。また，上総地域の草刈編年（加藤 2000）と比較すると，甕の型式変化から，草刈Ⅰ期の前・後半をそれぞれ本稿Ⅰ・Ⅱ期，草刈Ⅱ期前・後半を本稿Ⅲ期新・古段階に，草刈Ⅲ期を本稿Ⅳ期に，「和泉式期」を本稿Ⅴ期に設定できよう。

また甕における型式別の出土割合を見ると，Ⅲ期には一定程度甕 A が組成するが，数量的には甕 C が表２のデータでも 70％以上を占め，その傾向はⅢ期新段階より顕在化してⅣ期になると甕 A も消滅してしまう。このことは比田井の指摘するように茨城県域の古墳時代前期土器様式が上総地域の強い影響下に成立したことを示すといえる。

このように上総地域の影響が色濃い中でⅢ期古段階には在地要素である甕 K3 が若干ながら残存する。しかし現状として在地系要素としてⅢ期以降に確認できるのはこの点のみであり，土器から見た断絶性は従前の指摘通り非常に急激なものであったととらえられる。

また，遠隔地域の土器を見ると，S 字甕（甕 D）や北陸東部系甕（甕 E）があるが，それが主体的に出土する遺跡は確認できず，そのボリューム，系譜の数ともに少ないことも当該地域の特徴といえる。

おわりに

ここで，本稿で明らかになった点について整理しておく。まず，上稲吉式土器については原田遺跡群出土土器の分析から２時期設定（Ⅰ・Ⅱ期）が可能であることが分かった。また，その壺と甕の形態は，既往の現説とは逆行する形で明瞭に分けられることを示した。

そしてⅢ期には，既存の現説通り上総東京湾岸地域の影響下で劇的に土器様式が転換する一方で，甕には若干の在地系土器の様相が残存することも確認できた。在地系土器と，外来系土器との共伴資料から，Ⅱ期にはこの時期，周辺では遠隔地域の系譜を引く土器が多くみられることがあるが，茨城県南部では S 字甕などの出土例は僅少であり，少なくとも土器様相からは遠隔地域の影響は薄いといえる。

Ⅳ期になると，やはり関東平野で広く見受けられるように柱状脚高坏を主体とした様相に大きく変わり，それが粗雑化する形でⅤ期，すなわち古墳時代中期へと突入する。

以上，茨城県南部における弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての土器編年を提示した。各編年観はそれぞれの研究史を大幅に更新するようなものではないが，土器の編年観について一定の論拠をもって議論できる枠組みを設定できたと考える。この編年をもとに，茨城県南部における集落遺跡の動向について稿を改めて議論したい。

とはいえこの編年観も必ずしも盤石とはいえず，各時期の存続期間の差異など，各時期を均等に分けることができるかといった疑問に対して現在では有効な理論的枠組みを持たない。そのため，この編年観の補強あるいは見直しにあたっては周辺あるいは遠隔地地域との並行関係や暦年代なども十分検討する必要があろう。

本稿は 2020 年度修士論文として明治大学大学院文学研究科に提出した論説の第 1 章ならびに第 2 章を加筆修正したものです。本稿の執筆にあたっては修士論文主査の若狭徹先生はじめ，明治大学文学部考古学研究室の石川日出志先生，阿部芳郎先生，佐々木憲一先生，藤山龍造先生にも調査や発表の場で貴重なご指導を賜りました。

さらに，明治大学大学院にてともに学んだ箕浦絢，蒲生侑佳，山地雄大，そして大熊久貴には数多くのご助言を賜りました。ここに心より御礼申し上げます。また，本稿ならびに修論の執筆にあたっては資料のご提供や見学等に際しご厚意を数多くいただきました。以下に記し，末筆ながら感謝申し上げます。

赤井博之　猪狩俊哉　稲田健一　植木雅博　楠惠美子　小杉山大輔　小玉秀成　小林嵩　轟直行　比毛君男　松本康太郎

足利市教育委員会　石岡市教育委員会　上高津貝塚ふるさと歴史の広場　佐野市教育委員会　下妻市教育委員会　栃木市教育委員会　栃木市藤岡歴史民俗資料館　那珂市歴史民俗資料館　日立市郷土博物館　ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

注

（1） 鈴木素行が主に分析を行ってきた十王台式土器には小型でも頸部が大きくすぼまる小型の壺形土器といえる土器があるが，上稲吉式土器ではこのような土器は確認できていない。

（2） 小玉は「根鹿北式」の段階の「上稲吉式」口縁下端の貼瘤について，1 個単位のものを全周させるとしているが，根鹿北式と共伴する複合口縁の土器を見ると根鹿北式と共伴するものには複数個の貼瘤を単位としたものが共伴しており，型式変化としてとらえるのは難しいと考える。

主要参考文献

赤塚次郎 1990「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化センター pp.50-117

井上義安 1980「十王台式土器と五領式土器の共伴関係について」村田健二『千天』1980pp.206-208

岡本孝之 1993「大森時代と弥生時代　その関係について」「牟邪志」編集部（編）『牟邪志』第 6 号武蔵考古学研究会（発）pp.1-26

樫村宣之・小澤重雄・土生朗治・稲田健一・石橋充・石丸淳史・本田信之・谷仲俊雄・大久保隆史 2016「弥生土器から土師器へ―土器から見た地域間交流―」茨城県考古学協会（発）『シンポジウム考古学から見る茨城の交易・交流発表要旨』pp.52-75

柏瀬拓巳 2020「関東平野北部における古墳出現期の地域相―土器編年による集落，墳墓動態を中心として―」『考古学集刊』第 16 号明治大学文学部考古学研究室（編・発）pp.107-129

加藤修司 2000「土器編年案」『研究紀要』21 財団法人千葉県文化財センター pp.13-42

川崎純徳 1983「霞ヶ浦沿岸における弥生文化終末期の様相―特に貼瘤を持つ土器群を中心にして―」婆良岐考古同人会『婆良岐考古』第 5 号 pp.21-34

熊野正也 1985「弥生時代後期における小地域土器分布圏の成立―房総半島北部の臼井南式土器を中心にして―」『論集日本原史』吉川弘文館 pp.411-431

黒沢彰哉 1981「茨城県における古式土師器の問題」『婆良岐考古』第 3 号婆良岐考古同人会 pp.14-41

小玉秀成 2008「霞ヶ浦沿岸における弥生時代後期土器の変遷」明治大学文学部考古学研究室（編）『地域と文化の考古学Ⅱ』六一書房 pp.123-139

古墳時代研究班 1992「茨城県内における古墳時代前期の遺跡について」茨城県教育財団『研究ノート』創刊号 pp.19-23

古墳時代研究班（集落グループ）1996「茨城の『S 字状口縁台付甕』について」茨城県教育財団『研究ノート』5pp.45-69

古墳時代研究班（集落グループ）1997「茨城の『S 字状口縁台付甕』について（2）」茨城県教育財団『研究ノート』6pp.43-67

古墳時代研究班（集落グループ）1998「茨城の『S 字状口縁台付甕』について（3）」茨城県教育財団『研究ノート』7pp.45-56

古墳時代土器研究会（編）1997『土器が語る―関東古墳時代の黎明―』第一法規出版

酒巻忠史 1996「富津市打越遺跡の再検討―出土土器の編年試案―」財団法人君津郡市文化財センター（編・発）『君津郡市文化財センター　研究紀要』Ⅶ　pp.133-152

佐藤次男 1988「茨城県における弥生時代終末期の一様相―とくに十王台式土器と五領式沖の共存関係について―」斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会『考古学叢考下巻』吉川弘文館 pp.351-379

白石真理 1998「常陸における土器群の隔期と交流」庄内式土器研究会『庄内式土器研究』ⅩⅦ pp.30-42

鈴木素行 1997「原田北遺跡の『貼瘤』―『上稲吉式』分析のための基礎的な作業―」婆良岐考古同人会『婆良岐考古』第 19 号 pp.1-22

鈴木素行 1998「武田石高遺跡における十王台式土器の編年について―『十王台式』分析のための基礎的な作業―」

田口一郎 1981『元島名将軍塚古墳』高崎市文化財調査報告書 22 高崎市教育委員会社会教育課文化財保護係（編・発）pp.84-109

田中裕 2015「草刈古墳群土器編年と隣接地域への影響」西相模考古学研究会西川修一・古屋紀之（編）『列島東部における弥生後期の変革―久ヶ原・弥生町期の現在と未来―』六一書房 pp.319-332

西川修一 1995「東・北関東と南関東―南関東圏の拡大―」早稲田大学所沢港地理埋蔵文化財調査室『古代探叢Ⅳ―滝口宏先生追悼考古学論集』早稲田大学出版部 pp.175-208

比田井克仁 2004「古墳時代前期における関東土器軒の北上」史館同人（編・発）『史館』第 33 号 p.101-137

宮内良隆 1988「古墳時代の那珂町」那珂町史編さん委員会『那珂町史　自然環境・原始古代編』那珂町 pp.445-650

弥生時代研究班 1995「茨城後期弥生式土器編年の検討（Ⅳ）」茨城県教育財団『研究ノート』4pp.23-31

弥生時代研究班 1996「茨城後期弥生式土器編年の検討（Ⅴ）」茨城県教育財団『研究ノート』5pp.27-34

弥生時代研究班 1997「茨城後期弥生式土器編年の検討（Ⅵ）」茨城県教育財団『研究ノート』6pp.19-31

弥生時代研究班 1998「茨城後期弥生式土器編年の検討（Ⅶ）」茨城県教育財団『研究ノート』7pp.17-30

弥生時代研究班 1999「茨城後期弥生式土器編年の検討（Ⅷ）」茨城県教育財団『研究ノート』8pp.21-27

弥生時代研究班 2000「茨城後期弥生式土器編年の検討（Ⅸ）」茨城県教育財団『研究ノート』9pp.19-24
若狭徹 1990「群馬県における弥生土器の崩壊過程」『群馬考古学手帳』Vol.1 群馬土器観会 pp.11-32
・主要報告書
青木仁昌・小松﨑和治・大塚雅昭・鹿島直樹 2006『金谷遺跡２　北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団
石川功･藤原均 2004『北西原遺跡（第１次）　土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』土浦市教育委員会
石川功 2013『東谷遺跡（第１次調査）　住宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』土浦市遺跡調査会（発）
江幡良夫 1994『原田北遺跡　西原遺跡』財団法人茨城県教育財団
江幡良夫 1995『原出口遺跡　土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団
大塚雅昭･小松﨑和治 2004『金谷遺跡１　北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団
奥原遺跡発掘調査会（編）1989『茨城県牛久市文化財調査報告書　奥原遺跡発掘調査報告書』牛久市
小澤重雄 2000『六十目遺跡　葛城一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団
鹿島直樹 2005『辰海道遺跡４　北関東自動車道（協和・友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団（発）
勝田市史編さん委員会 1977『勝田市史別編Ⅲ東中根遺跡』
川井正一 2008『上野古屋敷遺跡２　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団
鴨志田祐一・早川麗司 2005『犬田神社前遺跡２　北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団
河野辰男 1984『天王峯遺跡報告書』牛久市・天王峯発掘調査会（発）
河野辰男 1988『天王峯遺跡報告書（第二次調査)』牛久市・天王峯発掘調査会（発）
後藤孝行 2005『石岡別所遺跡　一般県道石岡つくば線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団
川上直登 2002『上野陣場遺跡　中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人茨城県教育財団
窪田恵一・関口満 2009『永国遺跡（第３次調査）宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』土浦市教育委員会
小竹茂美・浦和敏郎『戸崎中山遺跡　霞ヶ浦環境センター（仮称）整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団（編・発）
後藤孝行 2005『石岡別所遺跡　一般県道石岡つくば線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団
駒澤悦郎 2005『薬師入遺跡　阿見吉原土地句会整理事業地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団
小松葉子他 2007『尻替遺跡　田村沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』土浦市教育委員会
財団法人茨城県教育財団（編・発）1981a『茨城県教育財団文化財調査報告Ⅴ　常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』
財団法人茨城県教育財団（編・発）1981b『茨城県教育財団文化財調査報告ⅩⅠ』
財団法人茨城県教育財団（編・発）1982a『茨城県教育財団文化財調査報告ⅩⅢ　石岡都市計画事業南大土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書　兵崎遺跡・大谷津Ａ遺跡・対馬塚遺跡・大谷津Ｂ遺跡・大谷津Ｃ遺跡・外山遺跡』
財団法人茨城県教育財団（編・発）1987『主要地方道砦筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書

境松遺跡』
財団法人茨城県教育財団（編・発）1991『神谷森遺跡　一般県道土浦岩井線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』
財団法人茨城県教育財団（編・発）1994『土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　原田北遺跡Ⅱ・西原遺跡』
財団法人茨城県教育財団（編・発）1995『（仮称）北条住宅団地建築工事地内埋蔵文化財調査報告書中台遺跡』
財団法人茨城県教育財団（編・発）1997『（仮称）島名・福田坪地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書　熊の山遺跡』Ⅰ
財団法人茨城県教育財団（編・発）1998『（仮称）島名・福田坪地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書　熊の山遺跡』Ⅱ
財団法人茨城県教育財団（編・発）1998『一般県道赤浜谷田部線県単道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書　高須賀中台遺跡』
財団法人茨城県教育財団（編・発）1999『（仮称）島名・福田坪地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書　熊の山遺跡』Ⅲ
財団法人茨城県教育財団（編・発）2000『島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書　熊の山遺跡』Ⅳ
財団法人茨城県教育財団（編・発）2001『島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ　島名前野遺跡』
財団法人茨城県教育財団（編・発）2002a『島名前野東遺跡・島名境松遺跡・矢田部漆遺跡　島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書』
財団法人茨城県教育財団（編・発）2002b『谷田部漆遺跡　島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 8』
財団法人茨城県教育財団（編・発）2006『島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書　島名熊の山遺跡』Ⅻ
財団法人茨城県教育財団（編・発）2007『島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書　島名熊の山遺跡』ⅩⅢ
財団法人茨城県教育財団（編・発）2010『島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書　島名熊の山遺跡』ⅩⅦ
財団法人茨城県教育財団（編・発）2011『小作遺跡　主要地方道竜ケ崎阿見線バイパス建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』
財団法人茨城県教育財団（編・発）2012『島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書　島名熊の山遺跡』ⅩⅧ
財団法人茨城県教育財団（編・発）2014『島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書　島名熊の山遺跡』ⅩⅩⅠ
酒井清治 2005『神明遺跡（第 5 次調査）』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 9 集
境雅彦・石川武志 2004『犬田神社前遺跡 1　北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団
榊雅彦・小林健太郎 2005『辰海道遺跡 3　一般国道 50 号（岩瀬 IC）改築事業地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団（発）
坂本勝彦 2014『高須賀中台東遺跡　一般国道 468 号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団
塩谷修他 2009『八幡脇遺跡　田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』土浦市教育委員会
関口満・土浦市遺跡調査会 1997『根鹿北遺跡・栗山窯跡発掘調査報告書』土浦市教育委員会

寺内久永・関絵美 2011『篠崎遺跡　阿見吉原東土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団（編・発）

寺門千勝・大関武 2000『明石遺跡　明石北原遺跡　上白畑遺跡　主要地方道つくば真岡線緊急地方道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団

仲村浩一郎・後藤一成・宮田和男・芳賀友博・鴨志田祐一 2004『辰海道遺跡 1　北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』財団法人茨城県教育財団（発）

比毛君男 2003『山川古墳群確認調査・西谷津遺跡・北西原遺跡第 6 次調査・神明遺跡第 4 次調査　土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』西谷津遺跡調査会

比毛君男 2004『北西原遺跡（第 3 次・第 4 次調査）山川古墳群（第 1 次調査）　土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』土浦市教育委員会

平松広毅 1980『泊崎城址　茨城県稲敷郡茎崎村泊崎城址発掘調査報告書』茎崎村教育委員会（発）

三反田遺跡群調査団 1979『三反田遺跡調査報告書（第 3 次）』勝田市教育委員会・三反田遺跡群調査会

美野里町教育委員会（編・発）1987『並木新田台遺跡』

向原遺跡調査会・土浦市教育委員会（発）1987『土浦市向原遺跡発掘調査報告書』

茂木雅博 1972『調査報告常陸須和間遺跡』雄山閣

吉澤悟 2002『常名台遺跡群確認調査・神明遺跡（第 3 次調査）土浦市総合運動公園建設事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書』土浦市教育委員会

吉澤悟他 2006『弁才天遺跡・北西原遺跡（第 5 次調査）土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』土浦市教育委員会

綿引英樹・小林悟 2008『薬師入遺跡 2　阿見吉原土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』財団法人茨城県教育財団

Relative Chronology of Pottery Excavated at Third- and Fourth-Century Settlement Sites in Southern Ibaraki Prefecture of Eastern Japan

KASHIWASE Takumi

This paper proposes a chronological framework of pottery excavated at settlement sites from the late second century (later half of the Late Yayoi period) to fourth century (Early Kofun period) in southern Ibaraki Prefecture, fifty miles northeast of Tokyo, eastern Japan. The previous research has made it clear that, while the Yayoi pottery in northeastern Kanto plain, including the southern Ibaraki Prefecture region, is characterized by cord-making on the entire pottery surface, several aspects of local pottery drastically changed at the beginning of the Kofun period or middle to late third century. However, possible backgrounds to this drastic change, such as interaction between local and foreign communities, remain to be discussed.

To approach the dynamics of temporal change in settlement systems, it is the premise to establish a solid chronological framework of pottery excavated at relevant settlement sites. For this purpose, the author first classifies pottery of the later half of the Late Yayoi pottery and pottery of the Early and Middle Kofun period separately and goes on to identify which sub-types of pottery were in association with which other sub-types to distinguish stages of temporal change in pottery types and assemblages. This leads the author to a five-phase local pottery chronology of this Yayoi-Kofun transitional period. The author's Phase II corresponds to the later half of the Late Yayoi period (early third century), Phase III to the early and middle phases of the Early Kofun period (late third and early fourth centuries), Phase IV to the late phase of the Early Kofun period (late fourth century), and Phase V to the early phase of the Middle Kofun period (early fifth century). A drastic change happened from Phase II to Phase III, and the author suspects that this change was a result of influence from local culture of the southern neighboring region, the present Chiba Prefecture.

Along with establishing this pottery chronology, the author also pays attention to the functional specification of types of local Yayoi pottery, so-called the Kami-Inayoshi type. The author morphologically distinguishes between the cooking jars and storage pots of this Kami-Inayoshi type pottery, based on quantitative analysis of a ratio between vessel height and neck diameter. The author's distinction is supported by the observation that only cooking jars retain soot on the vessel surface. It is also important to note that, despite the morphological difference between them, the same surface decorative patterns were applied to both cooking jars and storage pots. Furthermore, despite the drastic change from Phase II to Phase III, local elements of the Kami-Inayoshi type that gradually lost surface decorative patterns remained in Phase III.

Keywords: Pottery chronology, pottery classification, Yayoi-Kofun transition (third century A.D.) of proto-historic Japan, eastern Japan.